

富山城跡第1次調査報告

昭和43年3月

岡山県岡山市教育委員会

正 誤 表

頁	行 数	誤	正
4	4 行目	その南北 14 間	その北に南北 14 間
6	29 //	調査担当者	調査担当者
7	5 //	浅原健, 宮徳尚	浅原健, 出宮徳尚
10	15 //	北に伸び尾根と,	北に伸びた尾根と,
12	挿 図 2	この丸西列石状石垣	2 の丸西列石状石垣

序

都市化にともなう社会開発の進展により、文化財の保護保存については、ますます慎重を期し、その対策に万全を期さなければならない情勢になってきました。

このたび岡山市矢坂字高山にある富山城跡の第一次調査を実施し、この報告書を作成しました。

岡山の城下町が形成される以前の岡山平野の要所として築かれた富山城跡は、岡山の歴史を研究するうえに極めて重要な意義をもつものであります。

富山城跡一帯は岡山の特産物であるみかけ石（万成石）の産出地であり、明治以来の採石によってその一部はすでに失なわれている現状であります。

このためその保護対策として第一次予備調査を実施し、富山城跡の重要性を認識するとともに、今後の調査のうえに重要な手がかりを得るに至りました。この調査が文化財保護のうえに多少なりとも役だつならば幸いであります。

なお、この調査、および報告書作成にあたって多大のご協力をいただきました西尾建材西尾勝義社長、ならびに岡山大学考古学教室和島誠一教授はじめ関係者のかたがたに対し厚くお礼申しあげます。

昭和43年5月15日

岡山市教育委員会

社会教育課長 宮原秀臣

例　　言

1. この報告は、岡山市教育委員会により編成された富山城跡発掘調査団が、昭和42年10月に約2週間にわたり実施した岡山市矢坂山富山城跡の発掘調査に関するものである。
2. この報告は、第一次調査であるため、結論的記述はつとめて避け、また、内容に不備な点のあることはまぬがれないが、これらは後日、第二次以降の調査に待つこととする。
3. この報告の執筆は、第一章を巖津政右衛門、第二、第四、第五の各章を水内昌康、第三章および遺物の整理と実測を社会教育課出宮徳尚が分担した。
4. 実測図の浄写、および写真撮影は社会教育課にて実施し、出宮徳尚が行なった。
5. 古図、および本文中の城跡各個所名は今次調査にあたり付した仮称である。

目 次

第一 章	富山城とその歴史	1 頁
第二 章	調査の経過	6 頁
第三 章	繩張り，及び遺構	9 頁
第四 章	遺 物	15 頁
第五 章	結 語	18 頁
図版 1	本丸北下石垣	挿図 地 図 2 頁
〃 2	本丸西下石垣	〃 1 本丸西上石垣 11 〃
〃 3	本丸城門跡	〃 2 二の丸石列状石垣 11 〃
〃 4	掘り切り	〃 3 南の丸西石垣 12 〃
〃 5	土 壁	〃 4 南の丸石段 13 〃
〃 6	現状全景	〃 5 瓦拓本 15 〃
〃 7	遺物（瓦）	〃 6 備前焼実測図 16 〃
〃 8	遺物（宋錢，鐵釘）	〃 7 宋錢拓本 16 〃
〃 9	測量図（付古城図）	〃 8 鐵釘実測図 16 〃
		〃 9 儀石と瓦 17 〃
		〃 10 北の丸残景 18 〃

第一章 富山城とその歴史

1 概 観

富山城は岡山市西部にある矢坂山の山上に築いた中世の山城をいう。この城は標高1296メートルの山頂を基点とし、ほど南北の縁にびた尾根の上に帯状に縄張りを行ない、本丸をはじめ大小10を数える曲輪をつらね、要所々々に橋や城門を構えて防備を厳重にした典型的な山城で、南北の長さ約300メートル、東西の幅約50メートル乃至10メートル、東北の竜王口、西北の矢坂口、南方の大安寺口の三方に道を通じていた。

矢坂山の周辺は古代の条里制の跡をこの寸畫積を平野で、中世までの山陽道（西国往来）は、北方の船津の山塊を北へ越えた富原地内を東西に通じており、城からの距離約3キロメートルまた備前備中の圍境線は西方約4キロメートルの地点を南北に走っている。まことに岡山平野に勢力を張る城砦として絶好の要衝を占めており、その規模も近在にある中世の城砦中群抜くものであった。

2 沿革について

富山城の文献に見るのは江戸時代に入ってからである。その多くは城主とか城名あるいは攻防の戦いを軍記風に記したもので、とくにこの城を内容に亘って研究した記録は発見されていない。古文獻中時代も古く、比較的詳しく述べたのが宝永6年（1709）に高木太亮軒の編述した『和気綱』である。その第三巻三野郡の条に次ぎのように述べている。

一、富山城、昔富山山城大槻作成仍ち号す。万成山の上の山地（大安寺とも）松田左近将監數代之を領す。松田記に曰、備前一乱以後山名相模守領知として小鷹大和代官たり。福岡を構へ居城たりしが、細川勝元計略にて松田左近将監一族若党相供し、福岡に押寄せる。赤松が郎党ども數年の遺恨を散ぜんと、彼与力して則小鷹を追落し、本国たるに依て赤松政則知行行し、軍功の賞として伊福郷を松田に給はる。則富山城を築く。大乱の最中なれば一族共を催し西備前を數ヶ所横領すといふ。案するに松田は金川に十二代主たりといふ。元成は右の八代目也。松田氏滅亡の時は此城は老臣横井土佐居するなり。

天正の初より浮田左京亮忠家居城、入道して安心といふ。直家の弟也。暫有て息左京亮に城知共譲り其身は大坂に詣、肥近す、終大坂にて死す。（以下左京亮すなわち後の坂崎出羽守信頼の悲運な略伝を添えている）

最初の築城者だとする富山大槻は三野郡の藤社の開拓官であったが、富山氏の系脈は矢坂にのこり、その本家は總社の旧地を聚居にして住み、代々同地の八幡宮の宮司を勤めている。同家の家譜（火災に罹り近年再調）の中に、

創祖 富山大槻貞興、光孝天皇仁和年中、備前三野郡矢坂山を城地として築き富山城と名づく。その後凡そ六百年応仁元年、細川勝元、山名宗全と権を京に争ふ（中略）、富山備中長頼文明年中に松田勢の攻撃を受け訪棄えらばず、城の四方に火を放ちて自害す。文明五年元降

富山城跡周辺地形図



死す。その子左近将監元成居城、文明十年（十五年）津高郡金川へ移る。依て老臣横井土佐を置く。

このようない節がある。また矢坂の八幡宮の社記には、寛平年中に矢坂山の城主富山大掾重興が山城國男山八幡宮を勧請、山焼きの万成山の頂上に祀り、この地方の鎮守とした。文明年中富山城が松田氏に奪われると、富山氏は矢坂に土着したが、江戸時代になって、寛文九年に池田光政が富山越後拠吉隆をこの八幡宮の祠官に取立て、社殿を再興した。また總社はのちに八幡宮の境内に移して攝社とした、と述べている。

これらの文献で凡そその判断はできるが、松田記なども参考に加えて説明してみると、平安時代から三野郡に本拠をもった富山氏が、中世に入つて武士となり、いつか矢坂山に城砦を構えて勢力を張った。たまたま備前金川に居る松田元隆が応仁、文明の乱に際し、細川方の赤松氏に加担して、備前の福岡城にいる山名の代官小鶴大和を攻めて軍功を立てた。その賞として三野郡伊福郷を所領することになり、此地の旧勢力富山氏を追うて居城を奪い、城郭を修築して金川城から引き移った。元隆が死ぬるとその子元成が跡を継いで城主となつたが、彼は赤松の傘下に満足せず、機を見て備前一円を領有したい野望があつたので、文明15年になると地理的に有利な金川の城に帰り、富山城には弟の惣右衛門元親を入れて守らせた。

元親は文明17年2月の福岡合戦に出陣して戦死し、あとはその子の親家が惣右衛門を襲名して富山城主となる。明応6年浦上宗助が西備前に進攻、牧石に陣取つて富山城を攻めたとき親家は老臣横井土佐などと連城して勇敢に防戦した。その後横井土佐がこの城を守備し、また金川十一代の城主松田元盛の二男、左衛門尉盛明も在城して、金川の本城と連絡しながら備前西境の防備に当つた。ただしこれは12年7月、宇喜多直家に攻められて金川が落城したとき、盛明は金川城に居たが富山城へは帰ることができず、間道から備中へ脱出している。

松田氏の滅亡とともに富山城は宇喜多氏に移り、直家は異母弟の浮田忠家を城主として守らせた。この城は岡山城の西方1里余の丘陵上にあり、直家は初め富山城に拠つて城下町をつくる計画を抱いていたと云われるほどこの城の重要性を認めていたので、従来の城をさらに修補拡張して、強固な城郭に仕上げた。忠家の隠居後、その子左京亮が城主になると、南の平地にできた自然環濠を利用して根小屋を設け、平素の居館とした。この環濠を大河と呼び、その内が野殿村となる。

慶長5年宇喜多氏が没落したあと、岡山城には小早川秀秋が筑前名島から移つて城主となり、富山城も彼の領有に帰した。しかし徳川家康が一国一城の制を布く予備工作として、各大名に領国内の不用の城を破棄させたので、富山城も慶長67年のあいだに廃城となり、櫓や城門の一部は岡山城に引き取つた。戦災で焼失した石山門は富山城の大手門だったという説がある。

3 城郭について

富山城の櫓殴りや曲輪の規模については、具体的に記した文献に之しく、その概要を知り得るのは大正年間に刊行の「吉備群書集成」第一巻に収めた備前古城絵図の中の「富山城古図」（図版9）であろう。この絵図も編者が付言しているように、作者も作成年代も不明で、江戸

中末期に備前藩の軍学者の手に成ったものではないかと推測される程度であるが、城址を実測した見取図として信憑度の高い史料である。

この絵図によると、矢坂山の頂点の北（約60メートル）を中心を置き、こゝに南北15間、東西（中央にて）13間の曲輪をつくりて本丸とし、その南北14間、東西8間の曲輪、さらに北に繞いて南北17間東西7間の曲輪を設けて北の丸と呼ぶ。次ぎに本丸の南には一段低く南北20間東西7.5間の曲輪をつくり、その南には一段高く南北15間東西17間の曲輪があり、これを二の丸（仮称）と呼んでおく。これら南北の縁にのびた一連の曲輪の両側面には、細長い段形が断続しており、その東側に見える二三の段は、初めて帯状に連って馬場を構成していたものと考えられる。

また二の丸から南方に離れた尾根の上にも南北13間東西9間の曲輪があり、出丸と称する。この南の丸と2の丸との間は深く掘切って通路を設け、平素この掘切には木橋を架けて連絡していた。

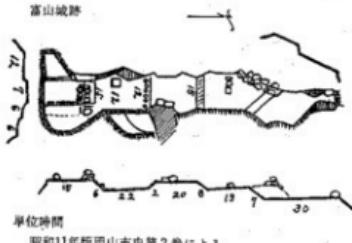
このほか西側の山腹には、櫓台と註記した孤立の小壘跡が四ヶ所あり、このうち南寄りの三ヶ所は本丸の西側から出た通路によって連絡、北端の一つは北の丸に道が通じている。

以上の古絵図に見える大小の曲輪は、その周辺に土居を兼ねまわして防禦にあてていたようだ。土塀らしいものが見えない。また本丸とその南の曲輪の接合点には石垣を積んでいる。ただし、この城は山の側面を急速に削り落しただけではなく、地形に応じて石垣を積んでいたようで、その残欠が今も諸所に遺存している。

山城に大切な水の手については、古図にしるしていないが、南の丸を西に下った谷間に鰐池と称する溜池があり、この池が富山城の水の手であったと伝えられる。いま1カ所、本丸の西側を約60メートル下った地点に、岩石の下から湧出する泉があった。この泉がまた富山城の「かくし水の手」と伝われる。

ついで城外との通路である。この古絵図には本丸の南にある曲輪の東側から、東の谷間にかかる道と、出丸の北端から谷間にくだり東南へ通じた道の二線が書き入れてある。

しかし実際には北の竜王口と、北西の矢坂口および南の大安寺口の三方から通路があった。



昭和11年版岡山市史第2巻による

このうち竜王口、矢坂口の二線は近年になって石材や土砂の採取が激しく、地形を一変したため途中で消えてしまい、大安寺口から登る山道だけが昔のまゝ残っている。

また古絵図で見ると本丸の南の曲輪から東へ下った道が大手に当るようであるが、市役所備え付けの現行地籍図「大安寺」の地割りを見ると、南麓大安寺部落にある大然寺の背後

に当る地点に「大手」の地名をのこしているので、この「大手」が富山城に關係ありとすれば出丸から東西に下った道がさらに南に向い、大安寺の家並にくだってゆく。即ち大安寺口の道が大手を示唆するものゝようである。この城の末期に設けられた野殿の根小屋との連絡も、大安口道によっている。

終りに、昭和11年3月岡山市役所の発行した岡山市史第二巻に掲載してある永山卯三郎実測の富山城址見取図について一言加えたい。

矢坂山は明治以降方成石の採掘が盛んに行なわれ、近年に入って一層激しく、石材だけでなく土砂まで採取されるので、城址の周辺もまた著しく削り取られて山容、地形を一変するに至った。しかし昭和10年前後の実測と考えられる永山氏の見取図を見ると、諸所に削られて絶壁となつたカ所は見えるが、それでもなお、本丸を中心にして南北に長く展開した城址はほど旧態を存しており、これを吉備群書集成所載の古絵図と対比するとき、概して各曲輪の位置や大きさが合致するばかりでなく、各曲輪の平面の記録に正確を期したこと、断面図により地形の高低を示したこと、南の丸に長方形をなす横跡を書き入れてあることなど、富山城跡の研究に欠くことのできぬ史料とされるものである。

第二章 調査の経過

富山城は岡山市の西部大安寺矢坂山の山頂（標高1296メートル）にある。矢坂山山塊は、東西約3キロ、南北1.5キロの独立した山塊であって、江戸時代の旧山陽道が、ほど中央部の万成、三門の鞍部を通って岡山市に入りており、西からの城下町への入口として要衝の地であった。山頂の城跡から北西を望めば、備前、備中の国境御津郡一宮町一帯を一望の内に收めることができ、また、北西の龍を津高町から南下した佐ヶ瀬川が野殿部落の西を迂回して流れている。南東の龍には、市街地が廢し高柳附近には条里制の遺構を仰瞰することができる。また市街地の南方に児島湾を隔てゝ児島半島を望見することもできる。（挿図、地図）

城跡は富山城古圖にみるよう、本丸を中心に、南北にわたって一連の曲輪が設けられ、周囲には櫓台をはじめ、腰曲輪、帯曲輪、出曲輪、掘り切り等縄張りの完備した中世城郭であった。しかるに、戦前から矢坂山山塊は良質の花崗岩（通称、万成石）の採石場として有名であり、昭和の初期頃にはすでに城跡の西側（矢坂部落に面した方角）はかなり採石のために削りとられて、櫓台をはじめ大手西側曲輪の一部は被剥いていた。戦後、万成石の需要激増と、他方では住宅、工場用地造成のため大量の採土が行なわれてゐるために、城跡附近の山容は現在ではいたましいまでに変貌している。山頂の城跡もこのまゝ放置しておいては、早晚削りとられ、あたら中世城跡遺構も完全に破滅することが予測されるにいたった。（図版、9）

この間、各方面から城跡保護について要望の声がおこっていたが、岡山市教育委員会としても保存対策を講ずるために城跡の所有者である西尾石材店主西尾勝義氏の理解ある協力を得て一応城跡の遺構の予備的調査を実施し、その結果資料に基づいて今後の保存計画をたてることになった。しかし、このたびの調査は日数の制限、その他の事情によって実測および一部発掘調査にとどまったが、いざれ第二次調査によって道路の完明を続行する予定である。

昭和42年9月22日、岡山市教育委員会によって富山城跡発掘調査団が編成され調査事前打合せを行った。

富山城跡発掘調査団の編成は次の通りである。

調査団

団長 岡山市文化財専門委員 水内昌康

調査委員 岡山市文化財専門委員 川津政右衛門（文献資料担当）

顧問 岡山大学教授 和島誠一

調査担当者 岡山大学法文学部助手 春成秀爾

調査担当者・その他 木村とし子

石丸 洋

岡山市教育委員会社会教育課

また、調査期間中の協力者として、岡山大学助教授、近藤義郎、岡山県教育委員会社会教育

操高橋謙、同葛原克人、同河本清、玉島高校教諭 小野一臣、香和中学校教諭内田一正、難波俊成、西尾石材社長西尾勝義、岡山大学学生（大木直太郎、龜山尚二、小倉裕三、山本勲一、山本博利、中村義市、松永初）および玉島高校、香和中学校の学生生徒諸君の参加をいたしましたことをお礼申しております。

なお社会教育課から文化係長浅原健、宮徳尚が参加した。

調査方針は、大体次のように決めた。城跡の完全実測を約2週間の予定で完了し、その間、本丸を中心として発掘し、実測担当は出宮、石丸があたり、発掘は水内、春成が担当することにした。

10月11日、午前9時集合、初日の午前中は現場全般にわたって地形状況を全員で調査検討した。北の丸はほとんど削りとられて僅か北端の一部が残存しているにすぎず旧曲輪の形を推定することも不可能な状態になっていた。（図版1）かつて、この北の丸からは焼夷が出土しており、また古瓦の破片が採石の過程でかなり出土していたことを現場の採石人夫から聞きとりをすることができた。

本丸と本丸北曲輪の間に東西に走る石列（後に石垣であることを確認）を認めることができた（図版1）。なお、この石列の上方にも、ほど東西に走る石列がありさらにこの石列より3メートル程南に、本丸遠邊の礎石4個を確認することができた（図版2）。

本丸の西側には上下二段にわたって石垣があり（図版2）、南には大手曲輪との界の所に門跡らしい石垣が左右にあり、その中央部に階段状の石列が残存していた（図版3）。

大手曲輪の東側、および西側は採石のため削りとられ、東西の幅は最狭部7メートル程度になっていた。

二の丸には巨岩塊が幾つもあり、東、西南の各縁には幾つもの石列があり、斜面にも認められた。二の丸から南に降りた所に掘り切りがあり（図版4），その中央部は通路となって土手状に高くなり、東と西に向って掘り下げられているが、大分埋っているようであった。

南の丸の東と南の縁には土塁がL字状に残っており、城跡唯一の土塁遺構である（図版5）。また、南の斜面には石列が四ヶ所認められ、西の斜面に残る石垣は、かなり大きな自然石が使用されていた（図版3）。

以上、古図を中心に曲輪遺構を点検したのであるが、予想以上に多くの石垣、石列、土塁、石段の残存遺構を確認することができた。なお、表面採集では、本丸の西端礎石のほとりで瓦片を（図版7、図版5），二の丸では、備前焼の破片を採集した（図版6）。さらに、二の丸、本丸付近では弥生式土器細片が点々と散布しているのが認められた。

午後からは、本丸北曲輪を中心に実測を開始し、発掘は本丸と本丸北曲輪との界にある本丸北下石（図版1）にそって北側に幅1メートルのトレーナーを掘ることにきめ、西端から発掘を開始した。

10月12日～13日、両日で石垣の中間付近まで（西端より1.2メートル）発掘が進み、石垣の基底部を確認することができた。高さは1メートル～1.2メートル程度で割石を整然と

積み重ねており、西端付近では瓦の細片を検出した。

10月14日、東半分の残存部の石垣跡は作業を続行し東端に達した。作業途中、古圖に示されている本丸と本丸北曲輪との通路の発見に留意して、石垣の追求を行なったが、それらしき状態の個所は判らなかった。むしろ、石垣は一直線をなして本丸と本丸北曲輪を画している状態を示していた。石垣の東端付近では、基底部の石垣はそのままの状態であったが、石垣の上部の石は崩れ、散乱した状態で出土した。

10月20日～22日まで、本丸北下石垣東端と本丸東側面の石垣との関連を明確にさすために、本丸北下石垣東端付近の発掘区域を拡大していった。その結果、本丸北下石垣の東端は本丸東側面の石垣と連なっておる状況を確認することができた。

さらに、この間、本丸北下石垣の上方にある石列の追求を行なったが、この石列は側面を掘り下げていったが石垣をなしておらないことが確認された。この石列の西端付近の地表下0.4メートルあたりで鉄釘(図版8)、および数個の瓦片を検出した。

大体、今次の発掘は、本丸北下石垣とその上方にある石列の追求にとどまつたが、その結果確認し得たことを要約すると、本丸北下石垣は、はじめ埋もれていたため、石列に見えたが発掘の結果、石垣(高さ1メートル～1.2メートル)をなしており、その東端、西端はそれぞれ本丸の東側石垣、西側石垣に連なっていることが確認された。従って本丸は南は城門の石垣があり、東側、西側ともこの城門の石垣に連なった石垣がめぐらされ、さらに北側は、本丸北曲輪との間に石垣を設け、四方を石垣で囲まれていたことが確認された。次に出土瓦が予想以上に少なかったことである。これについては第三章において述べるが、出土瓦の何れも二次的な火を受けてはいなかった。

一方、測量の進行状況は次のようであった。

- | | |
|--------|------------------------|
| 10月11日 | 本丸北曲輪より開始 |
| 10月12日 | 本丸北曲輪完了、本丸測量開始 |
| 10月13日 | 本丸西側測量 |
| 10月14日 | 本丸西壁斜面、および大手曲輪測量 |
| 10月15日 | 大手曲輪東側を中心測量 |
| 10月16日 | 大手出曲輪測量 |
| 10月17日 | 大手曲輪と二の丸の界にある巨石周辺の測量 |
| 10月18日 | 大手曲輪、二の丸測量 |
| 10月20日 | 二の丸東斜面測量 |
| 10月21日 | 二の丸東南端付近および南西部付近の測量 |
| 10月22日 | 二の丸測量完了、掘り切りおよび南の丸測量開始 |
| 10月23日 | 掘り切りおよび南の丸測量続行 |
| 10月24日 | 南の丸、南西の石段および掘り切り西側石垣測量 |

本丸北下石垣の一部実測

10月25日 南の丸測量完了

本丸北下石垣実測

以上、10月11日より、10月25日までの第一次調査において、初期の予定通り本丸北下石垣の発掘と、城跡全曲輪の測量とを完了することができたが、調査途中において追求を行なった本丸北下石垣の上方にある石列については、次期調査にこれが検討をゆだねることにしている。

第三章 繩張り及び遺構

1 繩張りについて

現在、この富山城跡のある矢坂山一帯では各所で採石、及び採土がおこなわれており、すでに城郭の一部もその被害を蒙っている。このため今回の調査では、城跡の現状把握を主目的の一つとし、残存する富山城跡全城の測量に主力を注ぎ、現状の城跡測量図を完成し、この城の遺構を各所で確認したと同時に、あらためてかなりの部分が破壊されているとも知らされた。この破壊箇所については後述するとして、今回の調査で完成した測量図と、この城の構造についての唯一の文献資料である吉備津書集成第一巻収集の富山城古図（図版①）とを対比させてみると、繩張りについてかなりのことが知れる。その曲線的表現法による差異や、細部の異なりこそあれ輪郭や各部が基本的に一致し、この古図に表わされている繩張は信憑性が高く、基本的に当時の繩張りを伝えていると認めることができる。従って破壊によってその繩張の一部を欠く現在の測量図より、この古図によって各名称（仮称）をつけ、繩張りについてみていく方がより妥当性があると思われ、繩張り全ての名称（仮称）はこの古図に基いて呼ぶことにしたい。（図版⑨）。

この富山城は、矢坂山頂を中心にはば同一の高さで北に伸び尾根と、南西にやや下った鞍部状の尾根に城の中心郭を設け、自然地形に拠った典型的な天然の要害を利用した山城である。城の繩張りは、尾根上の本丸を中心とし、北に本丸北曲輪、北の丸、南に大手曲輪、二の丸（三角点のある山頂）、やゝ下つて南の丸と中心郭を単列に配し、その両脇山腹に腰曲輪、帯曲輪、出曲輪、櫓などを設けて堅めたもので、中世に各所で見られる単列式（仮称）山城より発展したものとみることができる。今回の測量図では城の方向性は確認できなかったが、古図によれば明らかに大手筋は東となり、地形からみてもこの城の備えは西に対するもので、西に橹が集中して設けられている。

この城の繩張りでまず注意されるのは、大手筋の備えである。つまり、大手曲輪の東下に大手の備えとしては出曲輪を設け、これによって城外へ抜ける道は直角に曲げられ、しかも本丸東帯曲輪と半楕円形の馬出の変形と考えられる備え（馬出と仮称）との間を通して城外へ到る。この様な通路に対する備えは、近世的な被城にみられる大手の備えと基本的に一致する要素を持っており（説明が後にになったが、これが東を大手とした最大の理由である）、大手曲輪（中心郭）へ到る道と、出曲輪、馬出等による堅めの関係を持つ繩張りが施こされている城は、他の岡山市、及び周辺の数多くの城跡（岡山城を除く）では全く現在認めることができず、又古図でも見い出すことのできないものである。ことに富山城の持つ繩張上の特質の一つを見い出すことができ、この城を評価する一つの資料と見ることができる。

次で、繩張で注目されるのは、中心郭と明らかにこれらの一一つに附隨した小曲輪を設けた備えである（本丸にはない）。つまり、二の丸東の腰曲輪（古図では一つであるが、今回の

調査により上、下二段に分かれる可能性が大となった），大手曲輪東の出曲輪、馬出、西の帯曲輪、大手曲輪より伸びた本丸東の帯曲輪、西に点在する櫓と、中心郭でも主体となる本丸、大手曲輪、二の丸に対して備えがなされ、攻撃を受けた場合、これらに直接攻撃の及ばないよう配されている。山城という前提に立って、この様な中心各郭とその従的防備配置を施している面について見ると、周辺の城跡にはそれを見い出すことができず（他の山城では階段的順序的に各々の段が等質に立体化されているにすぎないものが多く、尾根にそって大小こそあれ段々に各郭が築かれている—代表例—龍之口城），中世の居館の曲輪や、近世的城郭の出曲輪や、その輪郭式城郭^⑨の防備性に基本的に通じるものがあるように考えられ、他の山城との対比に於て富山城の一つの特質とみることができよう。さらに古図が正しく表現しているという前提に立つが、西側面にみられる櫓台だけの個別設置は、たとえそれらが中世的掘立櫓であったにせよ、他の周辺の城跡では全くみることのできないものである。中心郭、出丸、曲輪内に櫓のあったことは、他の城でも想像にかたくないが、このように山腹城郭外に一つづつ櫓を配することは他に例を見ることができず、又、他の周辺の同時期の山城で明確に櫓台として繩張りがなされている所もなく、むしろ近世城郭の繩張りの出櫓や隅櫓にその基本的共通要素を見い出す方が、より妥当性があるのではないかと考えられ櫓台の設置も、他の山城との対比において、この富山城の繩張りの特質とみることができるのではないかろうか。

以上との城の平西的作事、繩張についての特質を記したが、一般的なものとしては、南の丸を詰の丸的存在とみることができる（周辺の土蔵層の山城はこの詰の丸はあまりない）。水の手は、この城中に湧水、井戸がなく、南の丸南西面高約3.0メートル下にある大成池が唯一の水の手であるが、本丸西面に湧水があるともいわれ、水の手として利用された可能性もある。

根小屋の位置について、古図には南の山下の野殿村にあったとしてあるが、二の丸南東下の谷から採石中に古鏡（宋鏡）や磁器片が出土しており、野殿に移る以前ここに根小屋があったと推定され、大手の方向とも一致し、浮田氏の初期にこの近くに根小屋が設けられていたのではないかろうか。

以上おおまかにこの城の繩張りについて見たが、本来、繩張りの語の内に各丸や曲輪の輪郭のとり方、石垣の築き方をも含めるのが本筋であるが、ここでは各丸の輪郭設定や、石垣の走り方については次の遺構の所で触れることに、平面的配置にとどめ、これらの持つ近世城郭の要素と中世的要素、他の城との対比による評価は、今後の発掘調査結果の資料を待たねばならない。

なお、今回の測量図と古図を対比した結果これまでに破壊された箇所が確認された。北の丸、本丸東帯曲輪、馬出、三つの櫓台が完全に破壊されており、本丸北曲輪、二の丸東腰曲輪が半壊、さらに本丸の東の末端線全部と西の一部、大手曲輪、大手西帯曲輪の一部も破壊を受け、全く人為的破壊を受けていないのは、二の丸と南の丸だけであり、東、北、西と三方から現代人に攻められている。

2. 追跡、及び上部構築物について

現在この城跡で平面的作事・柵張以外で明確に遺構と確認されるものは石垣である。石垣は、その機能として対人的防禦性と、その堅固さによる対自然的保全性があり、前者は人間行動を妨げるため高さ（面）と長さを絶対必要とし、同時に結果として後者をも包括するが、後者は必ずしも高さ（面）や長さを必要とせず、列石状の低い石垣でその機能をはたす。現在一部発掘によって確認された石垣をも含めてこの城跡の石垣についてみると、前者の条件を完全に満す所はないが、本丸下石垣や、同南石垣などはこれに近いものである。本丸北下石垣は発掘の結果現状（図版1）で高さ1~1.5メートル程度であり、上部の破損部を復原しても2メートルを越えるとは考えられず、完全に石垣としての対人的機能を満たすことはできないが、この上に土塀、柵等の構築物を設ければ、ほゞ機能を満すと考えられる。本丸西側面にある石垣（図版3）もほぼこれに類するものであるが、他の場所にある石垣は列石状のもので、なかにはかなりの斜面に築かれたものもあり、しかも数メートルぐらいづつ点在し、まさに後者の機能によるものと考えられ、現状では土留用の石垣としか認めがたいが、本丸北下石垣も発掘前は列石状に一部が点在していたにすぎず、発掘すればこれに近い石垣になる可能性も一部のものについてはある。しかし平坦部末端線にある列石状石垣は、当然その上部に土塀等の設置を考えるべきで、前者的機能をも有するもので、これは本丸、二の丸の東、西、南の一部及び二の丸東腰曲輪の中央にみられる。全体的に富山城跡の石垣は、岡山城、松山城（高梁市）城の本質は異なる）などの近世城郭の石垣の壯麗さや堅固さには及びもしないものであるが、要所は石垣で堅め、本丸の北石垣、南石垣の固めは、周辺の山城ではみることができず、同時期、あるいはやゝ遅上の山城で、石垣を築いているものは、主として守護代クラスのものに多い。又、本丸北下石垣の面は一直線であるが、西に残っている石垣には規模こそ小さいが屏風折、升形、斜（ひすみ）等の石垣石の工夫が施



插図1 本丸西上石垣



插図2 この丸西列石状石垣
この丸西列石状石垣は、主として守護代クラスのものに多い。又、本丸北下石垣の面は一直線であるが、西に残っている石垣には規模こそ小さいが屏風折、升形、斜（ひすみ）等の石垣石の工夫が施



插図 5 南の丸西石垣

こされており、大型化した近世城郭のそれらに通じる所がある。なお、本丸北下石垣の上斜面に、西に向ってほぼ同一高で斜めに延びる列石状の石垣が発掘で確認されたが、一部は明らかに石を取り除き、その跡へ土をつめた所が認められ、松田時代の遺構ではないかと考えられるが、今後の本格的調査を待たねばならない。又、本丸と大手曲輪との間の石垣は、現状ではかなり破損している

が、大手に対して中央に通路が 3.6 メートルの巾で開けられており、比較的大きな割石を用いて、中央の開けている間には石段と考えられる造構が点々と平坦部まで上っており、明らかに城門跡で、石垣の間を通っていることから稚門であった可能性もある。

全体的に本丸は、石垣がしっかりと築かれているが、他の所では明確に石垣と認められる所は少なく、二の丸東腰曲輪の中央部の列石状石垣や、南の丸西側の石垣くらいなもので、石垣によって堅めた所は少ない。南の丸の西側の石垣は、現状で一、二段積みであるが比較的大きな長方形の割石で築いたもので、全長 1.1.3 メートル、高さ 1 ~ 1.5 メートルであり、石垣というより石壘の側面に近い築き方である。南の丸の南側面には点々と土留状に石列状の石垣が築かれ、又、東北の隅は、1 立方メートル弱の石と、くり石と思われる小さな石で縦に段々状に石を積んで掘り切りの斜面を固めており、たの石積の上部の間に 3 メートルの間隔をおいて下にくり石を入れた石積があり、この石積は土壘の北端に位置し、古図の通路と一致する所から門の遺構と考えられる。

二の丸と南の丸（比高差 1.2.5 メートル）間には、南の丸より現状で巾 5.6 ~ 1.1.5 メートル、長さ約 3.0 メートル、深さ（南の丸より）2.7 メートルの掘り切りが施されている。側面はかなり流れで鈍くなっているが、南の丸側面の一部にはかなり急な所もあり、かつては鈍く掘り切られていたらしい。なお、古図によればこの掘り切りに木橋が架けてあったとのことであるが、その位置は、測量図の現在の道と、その東 1.2 メートルの所にある道路（これは前記の南の丸北東隅の門跡へ通じる）と二ヶ所考えられるが、確認は今後の調査を待たなければならない。

南の丸の東、南の側には、現状で最大巾 5.7 メートル、最小巾 1.8 メートル、最大高 0.7 メートル、全長約 3.7 メートルの土壘が I 型にめぐって残存している。この土壘の北端は、前記の東北隅の門跡に接し、東側の南北に走る部分が比較的よく残っているが、南側の西に曲る部分からかなり規模が小さくなり、西端は自然に消滅し、明確な遺構には接していない。全体的に南の東西に走る部分は、東側に比較して劣っており、これが自然流失による破損差によるも

のか、当時の築き方による差かは不明であるが、後者に基く方が可能性としては大であろう。なお、この土壘の西の清波する附近、及び東南角の南側の土壘下斜面には、列石状石垣が土留状に築かれており、前者の下2.5～3.5メートルの所にはかなり集中し、上下二段に築かれていてその西端はいずれも内側に曲り、この延長上と土壘西末端が一致していることは單なる偶然であろうか。い

ずれにせよこの土壘は岡山市周辺の山城では唯一のものである。

なお、南の丸の西に矢坂の部落に向って下っている尾根上に石段が築かれており、この尾根の上部端は土壘の西末端と一致していることから、石段との関連性が問題となるが、石段自体がかなり古いことや、石段上部に遺構が確認できないこと、矢坂の部落に通っていることなどから、富山時代の遺構ではないかと考えられる。全体的にみて、南の丸には多分に中世の遺構が多く残り、あるいは松田、富山時代の遺構が、浮田氏に部分的には改修されたであろうが利用されたのではなかろうか。

大手曲輪の南部、二の丸よりに、現状で最大深80センチ程のやや変形ひょうたん型の窪地があり、人工的な池と考えられ貯水池かも知れないが、それにしては小さく、池のすぐ南にある二の丸北端の巨石との関連で庭園的な造りを意図したものかも知れない。

以上の遺構の上や、これらにともなってどの様な上部構築物があったのであろうか。天守閣の出現は、今日、織田信長の安土城よりなるというのが定説で^③、天正5年(1575)頃から築造されたもので、時間的にはこの城(浮田氏)と差がないが、安土城とこの城では本質に於て異なり、対比しうるものでもないし、天守閣的な建造物を支えたと考えられる礎石は現状ではなく、又、出城ということや、岡山城の天守閣の築造が慶長初年ということを併せて考えると、まず富山城には天守閣がなかったと見るのが妥当であろう。しかし、現在の遺構を残した浮田時代にはこの城も、城として半永久的建築がなされたことは、現在残っている礎石、城門遺構、遺物によって充分に知ることができる。本丸北に平坦部末端に沿って上面の平な割り石が四個あり、明らかに礎石と認めうるもので、その一つの傍より稚児棟鳥糞の一部と考えられる丸瓦の一部と考えられる丸瓦の破片(挿図5.9)が採集され、又、北下石垣附近から丸瓦軒平瓦、平瓦が転落散乱状態で出土し、本丸の北の備えとしての礎石を中心にして本瓦葺(入母屋造りのものもあった可能性がある)の建築物、おそらく近世的な檜に近いものが築かれていたと考えられる。本丸中央部には自然石が露出し、礎石は目下認められず、又、瓦も表面採集できないが、南の門、石段からみて居館があったことは明らかであり、その構築物の確認は



挿図4. 南の丸西石段

今後の調査に待たれる。門跡の本丸側は、かなり流失し、石段も埋もれているが、礎石になりうる石も点在し、櫓門、廊下門に近いものがあった可能性もある。又、本丸の肩部の低い石垣（御図1）や二の丸の東、南、西の肩部にある列石状石垣（御図3）は、平坦部の肩を固めていることからみてこれを基礎とした何か、土堀、柵などの塗籠の物があったことを示すのではなかろうか。二の丸西よりには礎石と考えられる石が点々とあり、西肩部の石垣や附近に平瓦片があることからみて、この近くにも本瓦葺の永久的建築があったと考えられ、南西隅の備えとして柵のあった可能性が大である。しかし、全体的にみると、基底部となりうる石垣は少なく、特に附属曲輪の端ではなく、瓦片の出土も部分的であるところからみて中世的な掘立式の柵、門、柵も多分に用いられたことは想像にかたくない。

いずれにせよ、近世的な總土堀、純本瓦葺による建築ではなく、一部に近世的な本瓦葺、土堀を持つと同時に中世的な掘立柵、柵、土壘等の構築物で固めていたのがこの城の上部構築物の姿なのではなかろうか。

なお、戦災によって焼失した岡山城西丸石山門（本瓦葺廊下門）は、富山城の大手門を移築したとの伝承があり、信憑性はともかくとして参考とすべき伝承ではなかろうか。

松田氏の出城であったこの城が宇喜多氏の出城となったのは、永禄11年（1568）に松田氏の本拠、金川玉松城が宇喜多氏によって亡ぼされてからであり、宇喜多直家の舍弟浮田忠家が城主となり、以後宇喜多氏の前衛基地として岡山西部を固めた。松田氏滅亡後、岡山周辺の豪族は、宇喜多氏に従ったが直家はすぐに岡山に入ることができず、先ずこの城を岡山平定の拠えとする一方エスカレート的にこの地方の豪族層を逐次没落せしめた。こうして直家は、岡山城（石山城）の金光氏をも亡ぼして岡山城を入手し（元亁元年1570），廊下の部将を入城させて岡山に宇喜多氏の下地を徐々に確かなものとし、松田氏滅亡後5年目に岡山に入り、岡山城を本拠地とした。こうした宇喜多直家の備前統一、岡山への進出という歴史的過程の内で富山城の迫った役割は重要なものであった。松田氏滅亡後の岡山進出は、中小豪族の存在とあわせて必ずしも容易なことでなく、一つも二つも時間的緩衝帯を設けることが必要であり、この城は中小豪族への押さえの拠点として重要な位置にあった。このことは直家がその居城であった沼、龜山城から10キロたらざる岡山へ入るのに5年も要したことを見ても充分にうかがえる。無論、備中にに対する押さえ、備えはいうまでもないであろう。

富山城の縄張、造構、遺物一瓦（岡山周辺で瓦の出土が確認されている城跡はここだけである—岡山城を除く）等の他の周辺城跡に対する隔絶性、近世的要素は、この様な重要性に支えられたものであると同時にそれによって近世城郭へ発展しえない柵をもはめられていたのではないか。

- 註 ① 田中誠一編「吉備群書集成第1巻・備前古城繪図」吉備群書集成刊行会 1912年
② 大類仲、鳥羽正雄著「日本城郭史」553頁
雄山閣、1960年
③ 同上459、637頁

- 参考資料
岡山市史第2巻（昭和11年版）
岡山県通史
岡山県の歴史

第四章 遺物

このたびの調査で発見された遺物の内おもな物の出土地点、および品目をあげると次の通りである。

1. 本丸北下石垣発掘中に石垣基底部に近い所で検出された主なもの。
丸瓦破片 3 平瓦破片 15 軒平瓦破片 1
2. 本丸礎石西端近くで表面採集されたもの。
軒丸瓦破片 (稚児棟鳥衾と推定) 1
3. 本丸北下石垣上方の石列追求中に検出されたもの。
鉄釘 2 鉄小塊 3
4. 二の丸表面で採集されたもの
備前焼小破片 1

この他、採石作業中に、二の丸東南の谷合（根小屋と推定する附近）で発見されている古銭がある。また、富山城跡では以前から鏡が出土するといわれていたが、（おそらく炭化したものであろう）今回の調査においては検出されなかった。

以上の遺物について詳述してみると、

1. 丸瓦破片 (図版 7)

破片であるため、長さ不明であるが、幅は 15.5 センチ、厚さ 2 センチ 表裏とも灰黒色、施成はあまり固くなく、砂の混入はほとんど認められない。内側の凹面には、こまかい布目が認められ、その布目を擦り消した平行の条痕が斜に走っている。

2. 平瓦破片 (図版 7)

破片であるため、原形の大きさ不明である。灰黒色で厚さ 2.5 センチ、布目は認められず、表裏とも成形されている。

3. 軒平瓦破片 (図版 7 拡図 5)

正面の厚さ 4.3 センチ、文様構成をみると、外区は素文様をめぐらし、内区は唐草文様で葉の先端は巻かれ



図版 5 瓦 拓本



捕図 6

（前）焼窓側面



祥符元宝

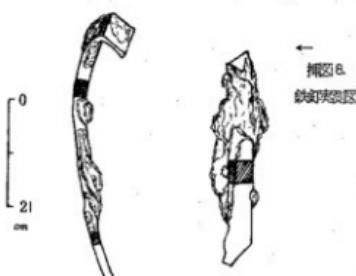
天禧通宝

天聖元宝



元豐通宝

淳熙元宝



←
捕図 8.
鉄塊側面

ている。破損箇所をみると字瓦全体の形をつくり范を文様面に押し当てたことがわかる。

4. 軒丸瓦破片（稚児様鳥文）（図版 7, 捕図 5）

本丸西端礎石のほとりに破片の一端を土中からあらわして埋もれていた。今次調査における唯一の軒丸瓦である。径約 18 センチ（復原推定）灰黒色で、外線は広幅で 4.7 センチ、内に殊文帯をめぐらしている。内区の文模は破片であるため不明である。外線の形状からみて、室町中期～安土桃山期のものと推定される。側面の形状からみて、稚児様の先端に置かれる鳥文である。

5. 鉄、釘、および鉄塊（図版 8, 捕図 8）

2 個の内 1 個は頭部の形状が明瞭で折曲頭角釘とも称すべきものである。長さ 5 センチ。他の一個は鏽ぶくれがして頭部の形状は不明であるが、角釘と推定できる。鉄塊は鏽ぶくれがひどく原形が判らない。

6. 備前焼破片（捕図 6）

色は赤褐色を呈し、外側上部に凸帯があり、その下 1.5 センチのところに朱痕がある。内

外とも刷毛によって成形され
浅鉢の肩部と推定される。

7. 古銭 (図版 8 拡図 7)

発見された 8 個の古銭の内訳
は、北宋銭 (祥符元宝 1 天
禧通宝 1 天聖元宝 1 熙寧
元寶 1 元豐通宝 1) と、南宋
銭 (淳熙元宝 1)、他の 2
個は判読できなかった。

出土数は至って少ねいが、こ
とに示された、北宋銭、南宋



拡図 7 掘石と瓦

銭の出土例は、從来古銭出土遺跡においては多量にみうけるところのものである。^①

なお、今次調査中、採石現場の石工からの聴取りによれば、戰前大手曲輪の西崖、採石
中に覗と一時に古銭の束を発見したとのことである。現在所有者不明。

なお、遺物は以上のほかに、半箱約一箱分の瓦破片の出土をみてある。

註① 昭和 31 年刊「日本考古学講座」所収
矢島恭介「貨幣」

第五章 結語

今次、富山城跡第一次調査の目的は、前述したように、予備的調査であって、破壊に類する城跡現状について完全な実測調査を行ない、造構状況を正確に把握するとともに、一部発掘を行ない、今後の調査および保存について対策の資料を得ることを主としたものである。従って、実測に重点がおかれて、それに基いた造構の考察は第三章において詳述されているが、城跡の実測、特に中世城郭の実測の意義についてふれておきたい。従来、中世城郭研究の多くは、人文地理学の立場、歴史学の立場、何れを問はず、参考とされる城郭縄張り図は簡単に実測された見取り図か、または、縄張り古図程度であって、正確な実測図ではなかった。その理由の一つは、中世城郭の位置は、ほとんど山上にあり山林に囲まれるなどして実測困難な条件が多分にあった為である。しかるに近時、中世城郭の内に近世城郭への発展の諸要素が多くあることが指摘されるにしたがって、中世城郭の基礎的な調査、即ち縄張り構成についての正確な実測は城郭史の研究に欠ぐことのできないものとなってきた。^① この意味において、今回の富山城跡実測の成果が単に当城跡の調査資料として活用されるのみならず、周辺中世古城跡造構研究に資するところあれば幸である。

次に実測と古図とを黒合して確認し得た曲輪の現状について概めてみると、

1. 完全に破壊消滅している曲輪。

北の丸（御園10），本丸東帯

曲輪、馬出、三つの櫓台

2. 半壊状態の曲輪

本丸北曲輪 二の丸東腰曲輪

3. 一部破壊の曲輪

本丸東端線全部と西側の一部、

大手曲輪西側 大手西寄曲輪

4. 完全に残っている曲輪

二の丸 南の丸



以上のように、現在完全に造構をと

どめている曲輪は二の丸、南の丸

挿図10 北の丸残景

の二つの曲輪のみとなって、他は半壊、または、完全に壊滅している。しかし、南北にわたる造郭の形状は充分確認できる。

石垣、石列の状態については、実測図によても判るように、石垣の造構が多いのは本丸の周囲であって、本丸の東側は削平されているが、石垣の背後に詰められたくり石が大量に露出しており、石垣があったことを如実に示している。このように、本丸は全曲輪の中で構築に最も重点がおかれており、特に西側石垣にみられる、「折れひづみ」の石垣構築様式や城門石

這是近世城郭の石垣橢築の初期の形式を偲ばすものがある。石列は、南の丸、二の丸に多く残存し、碌石、または斜面の土留めとしてみうけられる。

掘り切り、および土壘について考えてみると、南の丸にL字状に土壘跡を認め現状では高さは減少して判らないが、基底部の巾は約5.7メートルある。土壘の復原を想定してみると、基底部、高さ、上巾の比率は大体3：1：1の割合を妥当とされている。^② 従って基底部6メートルとして高さ約2メートル、上巾約2メートルとなる。勿論、これは想定であって、上土が流れて基底部が広がっていることを考えると、もっと低い土壘を想定しなければなるまい。また中世の土壘は、その外側にある掘り切りの土を積みあげて築いたことも予想される。南の丸のすぐ北側に掘り切りがあるが、掘り切りの排土の処理についてこの土壘は暗示をあたえているようである。

建造物遺構として明らかに認められるものは、本丸跡に残る四個の礎石、本丸城門と推定される石垣程度であるが、本丸北下石垣発掘の過程において検出した瓦から推定して本丸の建造物は、本格的な建造物であったことは間違いない、特に検出された雅見棟鳥食から一応入母屋造の形式の建造物を考えることも可能である。

以上、曲輪の現状、石道、掘り切り、土壘建造物遺構等について今次調査の結果を要約したのであるが、城跡全域にわたっての細部の調査は次期を待たなければならない。たゞ全体としていえることは、富山氏、松田氏、宇喜田氏、と中世から戦国、さらに近世初頭へと百数十年間の経過において、繩張りの拡張、補修が重ねられ、古図にみるような四面完備の繩張りが完成されたと考えられる。従って、南の丸のように中世山城の特色をとどめる土壘、掘り切りもあれば、また本丸の如く一部近世的遺構もうかがわれるであろう。

さて、当城跡保護の問題であるが、現状からみて早急に保存対策の必要を認める。第1に櫓台、腰曲輪、帯曲輪等は廃設しているが、城跡の連郭式の形式は本丸を中心にして残っており、土壘、石垣、掘り切り等の遺構は旧状をとどめている。第2に、城郭史の上からみて、中世から近世初頭にかけての変遷の過程を知るうえに重要な遺構（前述通り）が残っている。また、周辺の山城と比較して、繩張り形式が複雑で他に類例が少ない。特に大手出曲輪、大手馬出の繩張り形式は珍らしい。

今回の発掘では本丸の北下石垣の露呈によって一部を探り得たに過ぎない状態である。二の丸よりの池状の低地、掘り切り、本丸北石列の追求など今後残された問題が多い。しかも破壊の状況は憂慮すべき時期に立ちいたっている。この際、当局の積極的な保護対策を切望してやまない。

註①の 小室栄一「中世城郭の研究」昭和40年刊

富山城跡第一次調査報告

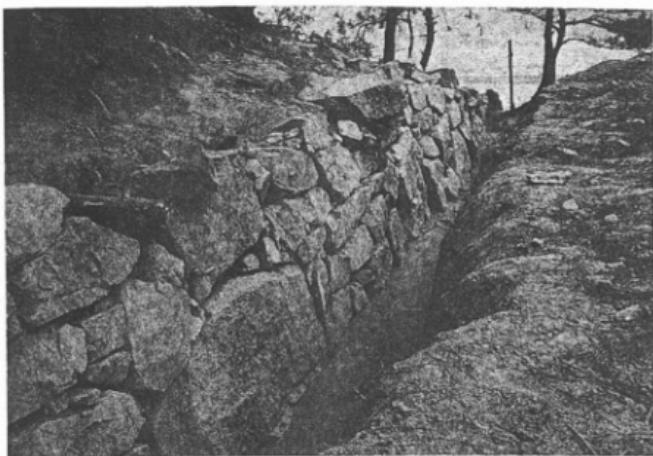
昭和43年3月15日印刷

昭和43年3月25日発行

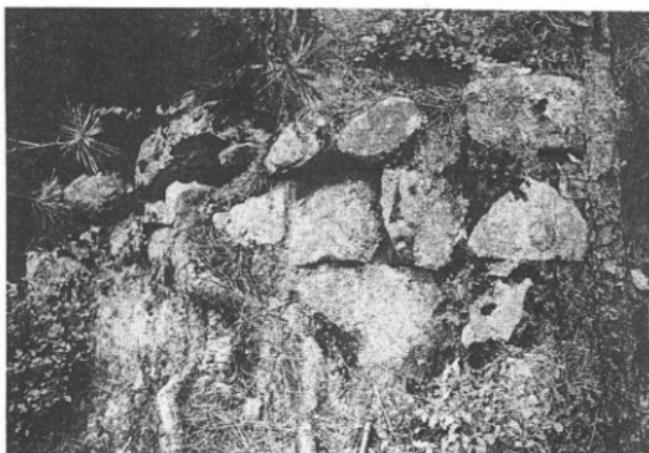
発行者 岡山市大供191の1

岡山市教育委員会

印刷所 岡山市内山下65
有限会社 旭タイプ



図版 1. 本丸北下石垣



図版 2. 本丸西下石垣



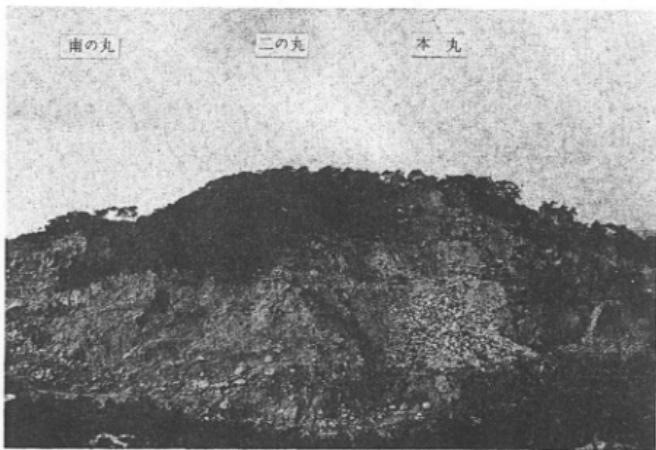
図版3. 本丸城門跡。



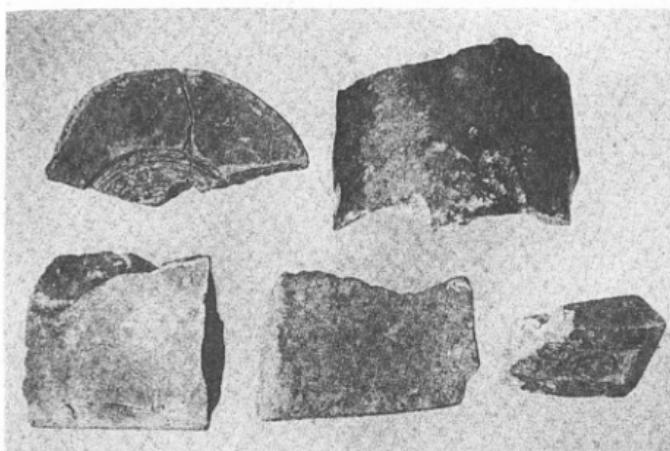
図版4. 挖り切り



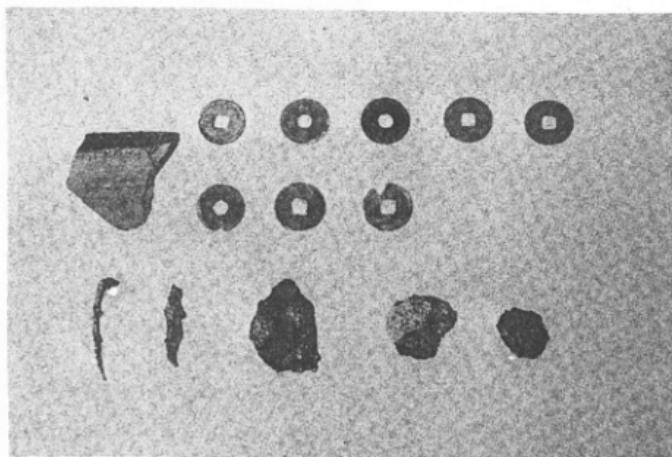
図版 5. 土 壁



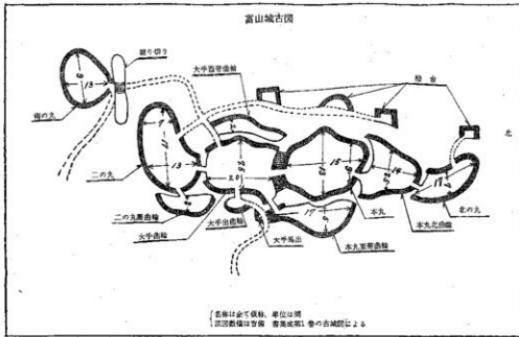
図版 6. 富山城跡現状全景



圖版 7. 遺物（瓦）



“圖版 8. 遺物（鐵釘，宋錢）”



关坂山富山城跡測量図

